タジキスタンの光と陰

島田志津夫 前在タジキスタン日本国大使館専門調査員

――タジキスタンとは？

今日はタジキスタンの現在を中心にお話しします。

皆さんは、おそらくタジキスタンという国の名前も、聞いたことがないかも知れませんし、タジキスタンがどこにあるのかということもご存じないかも知れません。中央ユーラシアの地図（p.005）の真ん中あたりにタジキスタンという小さな国があります。

中央アジアには旧ソ連の５つの国々があるのですが、カザフスタンやウズベキスタンは、最近ではサッカーのリーグでも名前をよく聞きますし、このごろ日本では、わりと名前が知られてくるようになりました。しかし、タジキスタンについてはほとんど知られていないのではないかと思います。

タジキスタンは参考データ（図表01）からわかるとおり、非常に小さな国です。人口も690万人ほどです。一人当たりのGDPは356ドルで、非常に貧しい国です。旧ソ連の中でも、最貧国と言われています。しかも、国土の90％以上が山地です。人が住める、あるいは農業ができるような平地はごく限られていまして、そこに人口が集中しているという状況です。

また、地図でお分かりになるとおり、タジキスタンの位置はアフガニスタンの北側にあります。中国とも直接国境を接している位置にあります。ここでは、タジキスタンという国が、そういう地理的な位置にあることを念頭に置いていただきたいと

思います。

タジキスタンは、旧ソ連の中央アジア５カ国のうち、唯一イラン系の民族を主体とする国家です。そのほかの、カザフスタン、ウズベキスタン、キルギス（クルグス）、トルクメニスタンは、テュルク系の民族を主体とする国々です。そこが他の４カ国とは少し違うところです。

――民族と言語

つぎに民族や言語について見ていきます。タジキスタンに住んでいる人々で、人口の主要な部分を構成しているのは、タジク人という人たちです。参考データ（図表01）を見ますと、タジク人がだいたい全人口の65％ぐらいを占めています。タジク人はイラン系の民族です。タジク人がしゃべっているタジク語もイラン系の言葉で、現在のイランのペルシア語や、アフガニスタンでしゃべられているダリー語とほぼ同じ言語で、方言程度の差しかないと言われています。じっさい、私は日本の大学でイランのペルシア語を勉強したのですが、以前にタジキスタンに行ったときに、現地の人々と話をして、私がしゃべるペルシア語を現地の人は十分理解してくれました。その程度の差しかないことを実感しました。

ペルシア語の歴史について、少しご説明します。ペルシア語は現在イランで国語となっている言語です。地図で見るとタジキスタンとイランは少し離れているのですが、実はほとんど同じ言語をしゃべっているということになります。

ペルシア語の歴史を見ますと、現在イランでしゃべられているペルシア語というのは、９世紀の中頃に中央アジアで確立した言語なのです。その後、中央アジアから次第にイラン方面にも、文章語として使われるようになった言語です。したがって、中央アジアに位置するタジキスタンで現在この言葉が使用されているということも、まったく不思議ではありません。

歴史的に、ペルシア語が行政言語、あるいは教養語、たとえば文学作品を著す時に使われる言語として重要な役割を果たした地域のことを「ペルシア語文化圏」

図表01　タジキスタン参考データ

１．面積	14万3,100平方キロメートル（日本の約40％）
２．人口	690万人（2006年初め：CIS統計委員会）
３．首都	ドゥシャンベ
４．民族	タジク人（64.9％）、ウズベク人（25.0％）、ロシア人（3.5％）など （2005年：CIS統計委員会）
５．言語	タジク語（国家語）、ロシア語（民族間交流語）
６．宗教	スンナ派イスラーム（85％）、イスマーイール派イスラーム（５％）（2003年推計）
７．元首	エマムアリ・ラフモン（2007年４月に「ラフモノフ」から「ラフモン」に改姓）
８．一人当たりのGDP	356ドル（2005年：EBRD）
９．主要産業	農業、綿花生産、アルミニウム精錬、水力発電

ということがあります。具体的には、イランやアフガニスタン、中央アジア、インド亜大陸、コーカサス、アナトリアなどです。地理的にかなり広い地域にわたって、歴史的にペルシア語が使われてきたのですが、中でもペルシア語を母語とする、つまり生まれながらにしゃべっている人たちが住んでいる地域、現在のイラン、アフガニスタン、タジキスタンが中心的な位置にあるといえます。

ペルシア語文化圏というのはこのように地理的に結構広い地域で、歴史的にも文学遺産、だいたい詩が多いのですけれども、それを共有してきたという歴史があります。ここでは、タジキスタンという国が、ペルシア語を通じてイランやアフガニスタンとつながりを持っている、あるいはタジク人がイラン系の民族であるということを、皆様にご理解いただければよろしいかと思います。

さて、少々話は飛びますが、次はタジキスタンの現在の状況はどうなっているのか、ということについてお話しします。タジキスタンあるいはタジク人は、中央アジアで長い歴史を持っているのですけれども、ここでは長い歴史のほとんどを省きまして、現在に焦点を置いてお話しします。

――独立から内戦へ

先ほど小松先生のお話にもありました通り、タジキスタンという国は、ソ連が崩壊して独立後、唯一内戦を経験した国です。独立したのは1991年９月です。ソ連時代は共産党の一党独裁ではあったのですが、ソ連時代末期から、民主主義を標榜する勢力やあるいはイスラーム主義者など、いくつかの派閥ができてきました。

1991年９月に突然独立することになりましたので、政治的混乱が起こりました。そこでいろいろな派閥がそれぞれの縄張りを主張しまして、内戦になってしまったのです。先ほど小松先生もお話しされたように、この内戦は共産勢力とイスラーム勢力のイデオロギー的な対立というよりは、むしろ地域主義的な対立という性格の強いものだったと言われています。

旧共産党勢力は、タジキスタン第二の都市である北部のフジャンドを中心とした勢力で、これはどういうことかといいますと、ソ連時代にこの地域から多くの共産党幹部を輩出したという背景があります。それに対してイスラーム勢力は、中部にガルム地方という山がちな地方があるのですけれども、そちらを勢力範囲としていまして、そこで武力衝突になっていったのです。

写真01　反政府イスラーム勢力の戦車の残骸（写真はすべて筆者撮影）

内戦の背景につきましては、非常に複雑

で、いろいろな要素が絡み合い、武力衝突にいたったと考えられていまして、詳しいことは、現在でもそれほど資料が整理されているわけではありません。

この写真（写真01）は、内戦がもっとも激しかったガルム地方に近い所で撮ったものですけれども、現在でも戦車の残骸など、内戦の傷跡が見られます。非常に激しい戦闘があったということが分かると思います。

――復興への道

そういう激しい内戦があったのですが、1997年６月の和平合意により内戦は終結しました。和平合意に至るに当たっては、国連や、ロシアやイランが仲介し、さらにはアフガニスタンのマスード将軍なども仲介に一役買ったと言われています。

和平合意の際、閣僚ポストの３割を反政府勢力に割り当てるという合意ができました。和平合意に至った経緯は、私がタジキスタンで現地の人から聞いた話では、内戦が始まってから、1992年～1997年まで５年も経って、政府側も反政府側もかなり疲弊していたようで、本音では「これ以上戦争していてもしょうがない」と思っていたようです。ただきっかけがないので、なかなかお互いがやめることができなかったらしいのです。そういう中で、国連やその他の国々が和平を提案してきたので、お互い「じゃあ、もうやめましょう」ということで和平合意に至ったと聞いたことがあります。

こうして「復興への道」を歩み始めますが、今申しました通り、タジキスタンの人々は内戦に疲れきってしまったようです。これ以上戦いを続けても国土は疲弊するばかりで、お互いにメリットがないということで、国民の間には政治的な安定を求める風潮が出てきました。

和平合意をした時の大統領が、当時ラフモノフという人で、現在も大統領を続けています。実はその人はタジク語風に苗字を変えまして、現在ではラフモンと言っています。ラフモン大統領は政府勢力と反政府勢力をうまく話し合いの席につかせて、お互いの言い分をまとめ、和平合意に至らせたことで、政治的な手腕をかなり高く評価されています。タジキスタンの人たちは、戦争はもう嫌だ、とにかく安定した政治が必要だと考えていて、ラフモン大統領に対する支持も大きなものがあります。

2006年11月に大統領選挙がありまして、再選された時、79.3%の票を獲得しています。当時、私もドゥシャンベで勤務していたのですが、選挙の様子を見てみますと、ラフモン大統領以外に４名の候補者が立ちまして、全部で５名の候補者が立って選挙が行われたのですが、比較的公正に選挙が行われたという印象を持ちました。その中で79.3%の得票を得たということは、タジクの人たちがとりあえずは現在のラフモン大統領に支持を示しているということだと思います。

余談になりますが、ラフモン大統領は、実は明日から日本を訪問することになっています。大分の別府市で「アジア・太平洋水サミット」という国際会議が開催され、それに出席するために訪日し、来週には福田首相と会談する予定と聞いています。

写真02　大統領選挙の際に掲げられたラフモン大統領の写真

ラフモン大統領は1952生まれで、現在55歳です。カザフスタンやウズベキスタンの大統領がそろそろ70歳を迎えようとしていることに比べると、若い大統領であるといえます。人柄は、テレビで見ても比較的人当たりがいいですし、あまり威張りちらすタイプではないようです。人を引きつけるような話術に長けているといえます。そういう人柄も内戦を終結させることができた要因のひとつでしょう。

写真（写真02）をお見せしましょう。

こちらがラフモン大統領の写真ですが、これは昨年11月の選挙の時に、街頭に掲げられた選挙ポスターです。街の中心に中央デパートという街で一番大きな商業施設があるのですが、その壁面に大きな写真が掲げられていました。この写真を見ていただいても、威圧的というより人を引きつける感じのする人だということが分かると思います。

――国際外交と経済開発

つぎに「国際外交と経済開発」について、タジキスタンが現在国際社会の中でどのような状況に置かれているのかを少々お話しします。タジキスタンは小さな山国で、しかも貧しい国です。隣のウズベキスタンなどには天然ガスや石油が埋蔵されているのですが、タジキスタンの場合は地下資源もほとんどありません。これといった産業もない国です。ソ連時代はほとんど中央政府からの補助金を頼りにして成り立っていたような国で、それがいきなり独立してしまって、どうやって国を経営していこうかというところですが、現在のところやはり国外からの経済援助が不可欠となっています。

写真03　ドゥシャンベの北方、アンザーブ峠付近の山々

そうした状況の中で、タジキスタン政府は、多面的な外交方針をとっています。その理由はやはり、タジキスタンが置かれている地政学的な位置が大きいと思います。アフガニスタンや中国と国境を接していま

写真04　パミール高原の雪解け水による激流

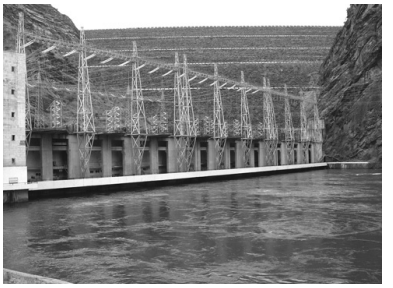

写真05　ヌレク水力発電所

写真06　水力発電所内部のタービン

写真07　ヌレク水力発電所のダム湖

して、しかもソ連時代には旧ソ連地域の最南端に位置する南の前線でありました。ソ連は1979年にアフガニスタンに侵攻しますが、その時もタジキスタンとアフガニスタンの国境が最前線であったわけです。それから9.11以降の国際情勢の中で、アフガニスタンにすぐ国境を接するタジキスタンは、軍事戦略上の重要性を増しているといえます。

そういう状況の中で、タジキスタンはなんとか経済的に発展しようと努力しています。その中で政府が掲げている二つの大きなプロジェクトがあります。

第一が水力エネルギー資源開発です。先ほども申しました通り、タジキスタンは国土の90％が山で、しかもアム川という、中央アジアを代表する大河の源流に位置しています。そしてパミール高原という5000メートル級の高地を抱えている地域でありますが、そういったことから水資源が豊富なのです。

この写真（写真03）はタジキスタンの山の風景です。首都ドゥシャンベの標高が800メートルほどありまして、そこから車で１時間ほど行きますと、このような山の風景が広がっており、この山の標高はおそらく4000メートル以上あるかと思います。この写真を撮ったのは６月ですけれども、まだ雪がありまして、この雪が重要なのです。夏になって雪解け水が川に流れこみ、その川の水が水資源になるのです。風景の非常にきれいな地域です。

これはタジキスタン東部のパミール地方で撮った写真（写真04）です。この川は、アム川の上流域です。アム川はタジキスタンとアフガニスタンの国境になっている川で、つまり川の対岸に見えていると

ころはアフガニスタン領になります。このように非常に激しい流れです。水資源の豊富なことが分かると思います。

この水資源はソ連時代から注目されていて、ソ連政府が水力発電所をつくっています。タジキスタンを代表する発電所としてヌレク水力発電所があるのですが、ダムの堤高が300メートルで、これは世界一の高さを誇っています。発電能力は300万キロワットです。参考までに、日本の黒部ダムは高さが186メートルで、発電能力は33万5000キロワットなので、その大きさがいかに大きいかということがお分かりになるでしょう。

この写真（写真05）の手前に写っているのが発電所の施設の部分です。その後ろに、ダムの一部が写っています。この写真で見るとそれほど高いように見えないのですが、実はとても巨大で、大きすぎてあまり高く見えないという感じです。この高さが300メートルあるわけです。

発電所内部では、こういうふうにタービンがまわって発電しています（写真06）。これがダムの上から下を見たところです。ダム湖の部分です（写真07）。この写真は 5 月頃に撮った写真だと思いますが、ダムの水はまだ少ないです。この後、夏になって、雪解け水が流れこんで、貯水池が一杯になります。

ソ連時代に、そのダムで発電された電力を利用してタジク・アルミ工場がつくられました。このアルミ工場は、アルミニウムを精錬する工場なのですが、実はタジキスタンではアルミの原料となるボーキサイトは産出されません。原料を他のところから持ってきて、その精錬だけを行っているのです。アルミの精錬は非常に電力を消費するので、この一つの工場だけでタジキスタン全土の40%の電力を消費していると言われています。

さらにヌレク水力発電所以外にも、ラグンやサングトゥーダ 1・2 ダムという、現在三つのダムをさらに建設中で、これらのダムは、ロシアやイランの援助を受けて建設しています。ダムの他に高圧送電線を整備して、タジキスタンは電力輸出国になろうと考えているのです。

世界にはいくつか山岳国があって、水資源が豊富な国が他にもあると思うのですが、水力発電だけで国を成り立たせていこうという国は、他にないのではないかと思われます。この計画が成功するかどうかは現在のところまだ分かりませんが、タジク政府は今、一生懸命にこれに取り組んでいるところです。

第二には、道路の整備を始めています。今年の夏に、アメリカの援助によって、アフガニスタンとの国境のアム川に橋が完成しました。これまでは、アフガニスタンとタジキスタンを結ぶ橋は、小規模で人が歩いて渡れる程度のものしかなく、トラックが渡れるような大きな橋はありませんでした。この橋の完成によって物資の輸送が飛躍的に増大することが予想されています。

シルクロードといいますと、我々の感覚ですと、中国からローマまでの東西方向の移動を思い浮かべることが多いのですが、実は南北方向の移動も重要です。

歴史的にも南北方向の移動はあったのですけれども、現在でも南北方向での交通路の整備が進められているわけです。タジキスタンは内陸にあって、海を持たない国ですが、南北に交通路が整備されれば、アフガニスタンやパキスタンを通じて南のアラビア海に通じることができますので、カラチの港からトラックでロシア方面に物資を運ぶことができるようになると考えているのです。

さらにタジキスタン国内で南北が通じるためには、二つの峠を越えなくてはなりません。この峠が3000メートル以上の高度があって交通の障害となっています。今その峠の下にトンネルを建設しています。それが完成すれば、本当に南北を貫く自動車道路が整備されることになります。このトンネル工事は、現在イランと中国が援助をしています。

このように、タジキスタン政府は経済を発展させるために二つの大きな計画を持っているのですけれども、その計画を実現させるために、いろいろな国から援助を取りつけようと努力しています。中でも第一はやはりロシアです。ロシアとの関係は非常に重要で、この関係なくしてはタジキスタンという国もなかなか成り立っていかないところがあります。ロシアとの関係は安全保障上も重要です。2005年にタジキスタンに移管されたのですが、それまでタジキスタンとアフガニスタンの国境警備は、ロシアの国境警備隊が行っていました。その他、タジキスタンにはロシアの駐留軍もありますし、宇宙の飛行物体を追跡するロシアのレーダー施設があります。

タジキスタンからロシアへ多くの人たちが出稼ぎに行っています。毎年のべ100万人と言われていまして、タジキスタンの人口が700万人弱ですから、いかに多くの人がロシアへ出稼ぎに出ているかということが分かります。しかもこの出稼ぎ労働者がロシアからタジキスタンへ送金する額が、2006年で約10億ドルに達したと言われています。参考までに2006年のタジキスタンの国内総生産は28億ドルです。経済のいかに多く部分を出稼ぎ労働者の送金に頼っているかということがお分かりになるかと思います。

タジキスタンにとって二番目に重要な国は中国です。中国は国境を接している隣の国です。タジキスタンに対しても最近、中国の影響力が徐々に大きくなってきています。中国は道路建設やトンネル建設、高圧送電線の建設などに、総額６億ドルの支援をおこなっています。これは支援といいましても借款でありまして、お金を貸しているので、将来的にはタジキスタン政府は中国にお金を返還しないといけません。それでも当座の資金としてお金を貸してもらえるということは、タジキスタン政府にとってはありがたいことで、そのお金を使って、先ほど申したような経済発展のための整備を行っています。

それから上海協力機構という国際機構がありますが、それにタジキスタンも加盟しています。国際情勢における上海機構の役割は、タジキスタンにとっても大きくなってきていることがうかがえました。例えば、８月にキルギスのビシュケ

クで上海協力機構の首脳会談が行われましたけれども、それ以外にもことあるごとに様々な会合が行われています。タジキスタンのドゥシャンベでも、例えば上海協力機構の文化大臣会合などが行われていました。そのようなことからも、上海協力機構の影響力が徐々に大きくなっているということを実感しました。

それから、先ほど一番最初に申しあげましたように、イランやアフガニスタンは言語的にも文化的にも近しい関係にありますので、タジキスタンにとっては重要なパートナーです。外交使節の往来もよくありまして、イランからエネルギー大臣が来たり、あるいはタジキスタンから大臣がイランやアフガニスタンに行くとか、そういうことがよくあります。

その他、タジキスタン政府はアメリカやEUや日本などとも仲良くしようと考えています。たとえば日本は、2004年の夏に、当時の川口外務大臣が中央アジア諸国を歴訪しました。その時に、「中央アジア＋日本」対話という枠組みを立ち上げました。日本政府が中央アジア諸国に対して、包括的に支援を行っていくという枠組みですけれども、タジキスタン政府は、そういう日本の取り組みにも期待を見せています。その他、EUも「中央アジア＋EU」というような枠組みを立ち上げましたし、中央アジアという地域は現在国際的にも注目を集めている地域です。

――おわりに

今までお話ししましたとおり、タジキスタンはとても小さな国で、貧しく、資源もなく、大変な国ですが、そうした国がどうやって生きていこうとしているのかということがお分かりいただけたかと思います。やはり一番大事なことは現在のラフモン大統領の政治的手腕です。そこで舵取りを誤りますと、タジキスタンという国の運命も悲惨なものになってしまうということで、その行方が注目されます。

2006年11月の選挙で圧勝しまして、その後、内閣改造を行って、和平合意では反政府勢力が閣僚の３割を占めるということになっていましたが、それらの人たちを追い出してしまいました。現在、閣僚の中には反政府勢力はほとんどいません。このように、大統領への権力の集中が見て取れます。さらにラフモン大統領は2007年４月に、それまでのラフモノフというロシア風の姓から、ラフモンという、よりタジク語的な姓に変えまして、民族主義的な傾向が強まりつつあるようにも感じられます。タジキスタンの行方、あるいはラフモン大統領の政治手腕の行方は、今後とも注目すべきものであると思います。

ご静聴どうもありがとうございました。

［しまだ　しずお］